

聖書:エレミヤ書20章7～18節

説教:火のような主のことば

はじめに

エレミヤが預言者として召されたのは、北王国イスラエルがアッシリアによって滅ぼされてからおよそ百年が経ったときです。そのときはまだ南王国ユダは存続はしていましたが、信仰的にはひどい状態で、バアルや天の女王と呼ばれるほかの神々を拝んでいる。そんなときにエレミヤは何度も「主に帰れ。そうしたらあなたがたはここで生き延びることができる」と叫ぶのですが、人々は聞く耳を持たない。それどころか、20章の前半に書いてあるように、祭司パシュフルがエレミヤを捕まえてむちで打って足かせにつないで迫害していく。そうやって人々はまったく悔い改めようとしません。それで結局バビロンの手でユダは滅ぼされてしまいます。そうしたらエレミヤはどう思うでしょうか。主のことばを伝えただけなのに、自分はなぜこんなひどい扱いを受けなければならないのか。心が折れそうになるでしょう。今日の所では、そのあまりのつらさに、エレミヤは主に文句を言っているようにも見えます。神に文句を言うは不信仰だと言う人もいますが、ではここをどう考えたらよいのか。そこにはどんな恵みが隠されているのか。ともに見てまいります。

1 エレミヤの嘆き

1) 笑いものになっている

エレミヤはどんなことがつらかったのか。7節後半に「私は一日中笑いものになり」とあり、その具体的な内容が10節にあります。「私が、多くの人のささやきを聞いたからです『「恐怖が取り囲んでいる」と告げよ。われわれも彼に告げたいのだ』と。私の親しい者もみな、私がつまずくのを待ちかまえています。『たぶん彼は惑わされるから、われわれは彼に勝って、復讐できるだろう』と。」

一体何を言っているのか、これは説明が必要でしょう。例を挙げます。コロナ感染が日本でも急速に拡大してみな不安になっていた頃、ある大学の先生がこんなことを言っていました。「感染拡大を抑えるためには人の接触を八割減らさないといけない。」この先生が連日テレビや新聞に登場するのですっかり有名になり、世間では「八割おじさん」と呼ぶようになりました。エレミヤが言っているのはこれに似ている。エレミヤは口を開けば

いつも警告していた。「バビロンがエルサレムを取り囲み、この町を滅ぼす。やがて恐怖に取り囲まれる。」でもバビロンがすぐに攻めてくるわけではない。「ああ、また言っているよ。」薄ら笑いしながら人々は、エレミヤのことを「恐怖おじさん」と呼んで冷やかしかじめた。それだけではない。先ほど見たように、エレミヤがむちで打たれて足かせにつながれてひどい目に遭わされているのを世間は見ている。「いったいどっちが恐怖に囲まれているかおまえのほうじゃないか。」世間はこんなふうにあざ笑ったというのです。

2) 「主のことばは宣べ伝えない」と思っても

それでエレミヤはどうしたか。9節前半。「私が、『主のことばは宣べ伝えない。もう御名によっては語らない』と思った。」「こんなバカバカしいことをやられてはかかると言っていて、語るのをやめた。それで心が安まったか。そうはならなかった。後半。「主のことばは私の心のうちで、骨の中に閉じ込められて、燃えさかる火のようになり、私は内にしまっておくのに耐えられません。もうできません。」

もう語るまいと思って口を堅く閉ざせば閉ざすほど、主のことばが心の内側で火のように燃えさかり、どんどん熱くなってきて心のうちに閉じ込めるのが難しくなる。それでとうとう耐えられなくなって、再び語らざるを得なくなったというのです。

3) 火のような主のことば

例えば、すばらしい映画やドラマを見て、その感激を誰かにしゃべりまくることがあります。聞かされる方はうんざりして、もうその話しはやめてと言われた。そんなとき、残念だと思うことはあっても、私の心のうちで燃えさかる火のようになって耐えられなくなる、ということにはあまりならないでしょう。エレミヤの場合は深刻です。ほんとうは語りたくないのに、あまりにも熱くなってきて語らざるを得なくなる。主のみことばがそうさせてしまうのです。それほどの力を持っていることを知らされます。

4) 私の生まれた日は、のろわれよ

エレミヤはできることなら主のことばは語りたくない。でももう一方からは語りなさいと迫られ

る。こんな分裂状態が続いていると、だんだんエレミヤは鬱的になったのではないか。どんどんマイナスのことを言うようになる。14節。「私の生まれた日は、のろわれよ。母が私を産んだその日は、祝福されるな。」

苦しみがあまりにもつらいとき、同じように思った方もおられるかもしれません。

2 主

1) なぜエレミヤは主に不満を述べるのか

どうして私はこんなに苦しまなければならないのか。だれもが感じる悩みです。苦しみになにか積極的な意味があるとは思えないのです。もしそうなら、これは不都合なことです。聖書には載せるべきではない。ところが、聖書にはエレミヤの嘆きが包み隠さず堂々と載せられている。エレミヤの嘆き、それは一見マイナスのもののように見えるけれど、実は主のご計画と深く結びついている、何か積極的な理由があるので、そのまま載せているのではないか。

2) 思いと心を見る

ではその理由とは何か。ヒントは12節です。「正しい者を試し、思いと心を見る万軍の主よ。あなたが彼らに復讐するのを私に見させてください。私の訴えをあなたに打ち明けたのですから。」

9章7節で主でこう言われました。「見よ、わたしは彼らを精錬して試す。」ここにも同じような表現、「正しい者を試す」が出てくる。主は、正しい者に苦しみを与えて試します。そういうと、みなさんは思いませんか。「信じている者を神は守ってくださいるはずではないのか。どうして正しい者が試されなければならないのか。」ところが主は正しい者も試すのだと言われる。困ったことではあるけれど、事実ですから受け入れるしかない。なぜ試すのか。何もないときには見えなかった思いと心を表に出させていく、そのためにわざわざ試すというのです。

エレミヤは苦しみの中に放り込まれた結果、それまでは表に出していなかった心の奥底に隠していた思いをストレートに出さざるを得なくなりました。なぜ、主はそのように仕向けたのか。弱音のようにも聞こえるエレミヤの告白に、実は大切な意味があるのではなか。そのことをイエス・キリストに目を留めながら考えていきます。

3 イエス・キリスト

1) わたしは悲しみのあまり死ぬほどです

イエスは、地上に来られて十字架に到るまでのあいだ、父なるご計画に対して従順に従われました。ただし心が揺れ動いたことが一回だけあります。それは、イエスが逮捕される直前、ゲッセマネの園で祈りのときです。マタイの福音書26章38、39節。「そのとき、イエスは彼らに言われた。

『わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、わたしと一緒に目を覚ましていなさい。』それからイエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈られた。『わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしが望むようにはではなく、あなたが望まれるままに、なさってください。』」

イエスがマリアを通して人となられて私たちのところへ来られたのは、ひとえに十字架のみわざを成し遂げるためでした。それは創世記で最初の人アダムとエバが罪を犯したときから、主が定めてくださったご計画です。イエス・キリストは十字架に真っ直ぐに向かうために来られました。途中で計画を変更しますとか、「やめておこう」と言って迷うようなことは絶対にありません。ところが、イエスは十字架が間近になった土壇場になると、「悲しみのあまり死ぬほど」ですと言い、「この杯をわたしから過ぎ去らせてください」と祈る。やっぱり迷ったのか。あまりのつらさに恐くなってしまい、計画を変更したかったのか。

2) 十字架のさばきと救いの喜び

もしそうなら、どうしてわざわざ三人の弟子を連れてきたのでしょうか。その弟子たちに目を覚ましていなさいと言って、弱音を吐かれるイエスの姿を見せるのはなぜか。やはりきちんとした理由があると思えない。

あのときイエスと弟子たちはどれくらい離れたところにいたのか。ルカの福音書22章41節。「そして、ご自分は弟子たちから離れて、石を投げて届くほどのところに行き、ひざまずいて祈られた。」「石を投げて届くほど」、近すぎもせず、離れすぎもしない。まことに微妙な距離ですが、そこには二つの意味があるように思います。近いという意味と、遠いという意味の二つです。一つは近いという意味です。私たちが苦しみに遭うとき、それがそんなにつらいものであるか、主も味わっておられる。そのことを示しておられる。二つ目は遠いという意味です。イエスが血の汗を流しながら祈る祈りに弟子たちは入ってはならないのです。十字架におかかりになるのはイエスただお一人だけ。ペ

テロが熱心に、「死ぬときは一緒に死にます」と言おうとも、ペテロもほかの弟子たちも十字架にかかってはならない。それはもちろん、私たちの罪の贖いができるのはイエスお一人だけだからという理由があります。でももう一つある。十字架の苦しみに耐えられるのは誰なのか、そのことと関わりがある。神のひとり子でさえ、「この杯をわたしから過ぎ去らせてください」と祈らざるを得ないほどの苦しみの場所だったのです。

3) 十字架のさばきの先にある救い

「でも」とまだ疑問に思われるでしょうか。イエスが悲しいとかつらいとか、そのようなことを私たちにわざわざ教えないで、淡々と十字架に向かってもよかったではないか。そのとおりです。しかし、ひとつだけ問題が出て来る。もし何も見せなかったのなら、イエスが内心、どれほど苦しんだのか私たちにはわからなくなります。わからなくてよいのでしょうか。イエスが苦しむ姿を通して、反対に私たちの罪がどれほどひどいものか浮き上がるのではないですか。イエスが、あえて弱音を吐く、その姿を見て、私たちは神の愛がどれほどに深いものかを知らされるのです。

エレミヤがなぜ主に対して自分のつらさを訴えたのか。聖書がわざわざエレミヤのそんな姿をちゃんと載せたのか。エレミヤが嘆けば嘆くほど、主がイスラエルを救おうとされている。その愛がどれほど深いものであったのかが浮き上がるのではないですか。エレミヤは、もう主のみことばは語らないと一度決心しました。けれども心のうちで火のように燃えさかる主のみことばは、どんなに語りたくないと思っても、エレミヤの口を通して表に出て来る。それほどまでに、神は私たちに悔い改めを求め、十字架のもとに来て救われなさいと語りたいのです。

神がどれほどに罪ある私たちを愛し、救おうとされているか。この愛をまだ知らない人々に伝えてまいりたいと願います。